



蓮池（不忍池）

芥川龍之介の「知性」

明治末から大正に入ると、日本文学は西欧の影響を強く受けた。夏目漱石、森鷗外に続き、芥川龍之介は、西欧文学の影響下で、教養主義を基盤とする文学の基礎を築いた。

芥川の文学に感じられる「知性」の香りは、彼の殆どすべての作品にあるものだが、漱石、鷗外の文学との相違は、作品に散りばめられた、繊細な知性とともにも、その対極となる「破局」が同居していることである。芥川は自殺によって、才能に溢れた文筆活動を、わづか二十七才で閉じてしまった。驚くべきことに、自らの「敗北」について、晩年の作品の中に書き留めているが、それらは真剣な告白である。心は宗教に向かつていて、枕元には聖書が置かれていたという。

芥川龍之介は初期の歴史小説をはじめとして、新鮮な素材を我が国の古典に求め、しかも西欧文化を採り入れて、多くの短編、エッセイを公表した。「羅生門」、「地獄変」などの作品は、名作の誉れが高いが、童話童話雑誌「赤い鳥」に発表した童話もある。「赤い鳥」の創刊号に書いた創作童話「蜘蛛の糸」や、同じく「赤い鳥」に掲載された「杜子春」は、人生を深く考えさせるテーマでありながら、子供にも分かる平易な言葉で書かれている。これらを読み、芥川文学の一端に触れてみよう。

蜘蛛の糸

芥川龍之介

一

ある日の事でございます。御釈迦様は極楽の蓮池のふちを、独りでぶらぶら御歩きになつていらつしやいました。池の中に咲いている蓮の花は、みんな玉のようにまっ白で、そのまん中にある金色の蕊からは、何とも云えない好い匂が、絶間なくあたりへ溢れて居ります。極楽は丁度朝なのでございましょう。

やがて御釈迦様はその池のふちに御佇みになつて、水の面を蔽っている蓮の葉の間から、ふと下の容子を御覧になりました。この極楽の蓮池の下は、丁度地獄の底に当つて居りますから、水晶のような水を透き徹して、三途の河や針の山の景色が、丁度覗き眼鏡を見るように、はつきりと見えるのでございます。

するとその地獄の底に、犍陀多と云う男が一人、ほかの罪人と一しよに蠢いている姿が、御眼に止まりました。この犍陀多と云う男は、人を殺したり家に火をつけたり、いろいろ悪事を働いた大泥坊でございしますが、それでもたった一つ、善い事を致した覚えがございします。と申しますのは、ある時この男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛が一匹、路ばたを這つて行くのが見えまして。そこで犍陀多は早速足を挙げて、踏み殺そうと致しましたが、「いや、いや、これも小さいながら、命のあるものに違いない。その命を無暗にとると云う事

「蜘蛛の糸」のあらまし

この作品は、芥川龍之介が大正七年（一九一八）、雑誌「赤い鳥」に発表した童話で、子供向けの短編である。

主人公のカンダタ（犍陀多）は、大泥棒や人殺しなどの悪事を重ねたため、地獄に落とされた。しかし一度だけ以前善い行いをしたことがあった。それは小さな蜘蛛を助けたことで、そのためお釈迦さまは、地獄の底のカンダタを極楽に招こうと、一本の蜘蛛の糸をカンダタに向けて下した。

カンダタはこの糸を伝つて、地

は、いくら何でも可哀そうだ。」と、こう急に思い返して、とうとうその蜘蛛を殺さずに助けてやったからでございませぬ。

御釈迦様は地獄の容子を御覧になりながら、この犍陀多には蜘蛛を助けた事があるのを御思い出しになりました。そうしてそれだけの善い事をした報には、出来るなら、この男を地獄から救い出してやろうと御考えになりました。幸い、側を見ますと、翡翠のような色をした蓮の葉の上に、極楽の蜘蛛が一匹、美しい銀色の糸をかけて居ります。御釈迦様はその蜘蛛の糸をそつと御手に御取りになって、玉のような白蓮の間から、遙か下にある地獄の底へ、まっすぐにそれを御下しなさいました。

二

こちらは地獄の底の血の池で、ほかの罪人と一しよに、浮いたり沈んだりしていた犍陀多でございませぬ。何しろどちらを見ても、まっ暗で、たまにそのくら暗からぼんやり浮き上っているものがあると思ひますと、それは恐しい針の山の針が光るのでございませぬから、その心細さと云つたらございませぬ。その上あたりは墓の中のようにしんと静まり返つて、たまに聞えるものと云つては、ただ罪人がつく微な嘆息ばかりでございませぬ。これはここへ落ちて来るほどの人間は、もうさまざまな地獄の責苦に疲れはてて、泣声を出す力さえなくなつていたのでございませぬ。ですからさすが大泥坊の犍陀多も、やはり血の池

の血に咽びながら、まるで死にかかった蛙のように、ただもがいてばかり居りました。

ところがある時の事でございませぬ。何気なく犍陀多が頭を挙げて、血の池の空を眺めますと、そのひっそりとした暗の中を、遠い遠い天上から、銀色の蜘蛛の糸が、まるで人目にかかるのを恐れるように、一すじ細く光りながら、するすると自分の上へ垂れて参るのではございませぬか。犍陀多はこれを見ると、思わず手を拍つて喜びました。この糸に縋りついて、どこまでものぼつて行けば、きつと地獄からぬけ出せるのに相違ございませぬ。いや、うまく行くと、極楽へはいる事さえも出来ませぬ。そうすれば、もう針の山へ追い上げられる事もなくなれば、血の池に沈められる事もある筈はございませぬ。

こう思ひましたから犍陀多は、早速その蜘蛛の糸を両手でしつかりとつかみながら、一生懸命に上へ上へとたぐりのぼり始めました。元より大泥坊の事でございませぬから、こう云う事には昔から、慣れ切つていたのでございませぬ。

しかし地獄と極楽との間は、何万里となくございませぬから、いくら焦つて見た所で、容易に上へは出られませぬ。ややしばらくのぼる中に、とうとう犍陀多もくたびれて、もう一たぐりも上の方へはのぼれなくなつてしまひました。そこで仕方がございませぬから、まず一休み休むつもりで、糸の中途にぶら下りながら、遙かに目の下を見下しました。

すると、一生懸命にのぼつた甲斐があつて、さつきまで自分がいた血の池は、今ではもう暗の底にいつの間にかかくれて居ります。それからあのぼんや

獄から何万里も上にある極楽に向つて登り始めた。ところが糸を伝つて登つている途中で、カンダタがふと下を見下ろすと、多くの罪人達が自分のあとをつけてくるではないか。このままでは糸は重さによつて切れ、皆落ちてしまふと思つたカンダタは、「この蜘蛛の糸は俺のものだぞ、お前たちは一体誰に聞いて登つてきたのだ。下りろ。下りろ」とわめいたのです。その次の瞬間、蜘蛛の糸は、カンダタのぶら下がつて居る所から切れてしまひ、カンダタは再び地獄に落ちてしまつた。

お釈迦さまは極楽から一部始終をご覧になつて居た。自分だけ地獄から抜け出そうとするカンダタの無慈悲な心がお釈迦さまには浅ましく思われたに違ひありません。

「自分だけ良ければいい・・・」

という「蜘蛛の糸」のはなしは、ドストエフスキーの小説、「カラマゾフの兄弟」の中の「一本の葱」という挿話から着想したものとされて居る。この芥川作品は奥深さをもつていて、諸外国語に翻訳され、日本を代表する名作として知られるようになって居る。

「赤い鳥」

鈴木三重吉が、大正七年（一九一八）に創刊した童話と童謡の児童向けの雑誌で、近代の児童文学の創世期に大きな役割を果たした。

鈴木三重吉は、彼の目からは低俗に見える、政府主導の唱歌や説話に対して、もつと純粹な子供の世界の話、歌を作つて世に広めることを宣言し、「赤い鳥」

り光っている恐しい針の山も、足の下になつてしまいました。この分でのぼつて行けば、地獄からぬけ出すのも、存外わけがないかも知れません。犍陀多は両手を蜘蛛の糸にからみながら、「ここへ来てから何年にも出した事のない声で、「しめた。しめた。」と笑いました。ところがふと気がつきますと、蜘蛛の糸の下の方には、数限もない罪人たちが、自分ののぼつた後をつけて、まるで蟻の行列のように、やはり上へ上へ一心によじのぼつて来るではございませんか。犍陀多はこれを見ると、驚いたのと恐しいのとで、しばらくはただ、莫迦のように大きな口を開いたまま、眼ばかり動かして居りました。自分一人でさえ断れそうな、この細い蜘蛛の糸が、どうしてあれだけの人数の重みに堪える事が出来ましょう。もし万一途中で断れたと致しましたら、折角ここへまでのぼつて来たこの肝腎な自分までも、元の地獄へ逆落しに落ちてしまわなければなりません。そんな事があつたら、大変でございます。が、そう云う中にも、罪人たちは何百となく何千となく、まっ暗な血の池の底から、うようよと這い上つて、細く光っている蜘蛛の糸を、一列になりながら、せつせとのぼつて参ります。今の中にどうかしななければ、糸はまん中から二つに断れて、落ちてしまうのに違いありません。

そこで犍陀多は大きな声を出して、「こら、罪人ども。この蜘蛛の糸は己のものだぞ。お前たちは一体誰に尋いて、のぼつて来た。下りろ。下りろ。」と喚ぎました。

その途端でございます。今まで何ともなかつた蜘蛛の糸が、急に犍陀多のぶら下つている所から、ぷつりと音を立てて断れました。ですから犍陀多もたまりません。あつと云う間もなく風を切つて、独楽のようにくるくるまわりながら、見る見る中に暗の底へ、まっさかさまに落ちてしまいました。

後にはただ極楽の蜘蛛の糸が、きらきらと細く光りながら、月も星もない空の中途に、短く垂れているばかりでございます。

三

御釈迦様は極楽の蓮池のふちに立つて、この一部始終をじつと見ていらつしやいましたが、やがて犍陀多が血の池の底へ石のように沈んでしまいますと、悲しそうな御顔をなさりながら、またぶらぶら御歩きになり始めました。自分ばかり地獄からぬけ出そうとする、犍陀多の無慈悲な心が、そうしてその心相当な罰をうけて、元の地獄へ落ちてしまったのが、御釈迦様の御目から見ると、浅間しく思召されたのでございましょう。

しかし極楽の蓮池の蓮は、少しもそんな事には頓着致しません。その玉のような白い花は、御釈迦様の御足のまわりに、ゆらゆら萼を動かして、そのまん中にある金色の蕊からは、何とも云えない好い匂が、絶間なくあたりへ溢れて居ります。極楽ももう午に近くなつたのでございましょう。

(大正七年四月十六日)

を創刊した。創刊号には、芥川龍之介のほか、有島武郎、泉鏡花、北原白秋、高浜虚子、徳田秋声らが賛同し、その後菊池寛、西条八十、谷崎潤一郎、三木露風らが作品を寄稿した。

芥川龍之介の「蜘蛛の糸」「杜子春」、有島武郎の「二房の葡萄」、鈴木三重吉の「お馬」、北原白秋の「からたちの花」、西条八十の「かなりあ」などが掲載された。

昭和五十九年(一九八四)、日本童謡協会は、「赤い鳥」が創刊された七月一日を「童謡の日」と定めた。